

所 管 事 務 調 査 報 告

令和 7 年 7 月 4 日

薩摩川内市議会総務文教委員会
委員長 山 中 真 由 美

1 調査事項

- (1) 学校教育について
- (2) 情報化施策について

2 調査先

大阪府箕面市、大阪府枚方市、広島市

3 調査日

5 月 2 6 日から 2 8 日まで（3 日間）

4 出席委員

山中委員長、小林副委員長、下園委員、福田委員、成川委員、坂口（正）委員、松野委員、佐多委員

5 調査目的

従来の学校とは異なる教育理念や I C T 技術等を活用した不登校対策と、教育現場の D X 化について先進地を視察し、本市における今後の施策展開の課題等を調査する。

6 調査概要

(1) オルタナティブスクールにおける活動について（大阪府箕面市）

箕面こどもの森学園は、公立・私立に属さない新しい選択肢の学校「オルタナティブスクール」であり、「子どもは自ら学ぶ意欲を持ち、自らの力で学ぶことができる」という教育観のもと、子どもの主体性と自由な表現を尊重する「フレネ教育」や、個性を尊重しながら自律と共生を学ぶ「イエナプラン教育」を取り入れている。

毎朝自由に自分のことを話す時間「ハッピータイム」でコミュニケーション能力向上を図るほか、学習計画を自身で設定し、学校行事を自分たちで企画・運営することで、自立性と協働性が育まれる環境を整えており、これら独自のプログラムを通して、他校で通学が困難だった子どもが自主性や自己肯定感を取り戻した例もあるとのことであった。

一方で、公的補助はほとんどなく、運営費の大半を学費に依存しているため学費が高額であるほか、無認可校であることから本学園への通学がそのまま出席扱いにはならず、本来の在籍校の校長に出席判断が委ねられているなどの課題も見受けられた。

(2) 不登校対策について（大阪府枚方市）

枚方市では、不登校児童生徒の増加に対応するため、学校復帰のみを目的とせず、社会的自立を視野に入れた支援体制の構築を進めていた。中でも、様々な背景を抱えた子どもたち一人ひとりに応じた多様な居場所づくりを推進しており、教育支援センターやフリースクール等との連携のほか、メタバ

ース（仮想空間）を試行運用するなどして居場所を提供していた。

また、関係課からの横断的な協力を得て、従来の「不登校支援ガイド」を「子どもの居場所サポートガイド～不登校支援ガイド～」へと改訂し、フローチャートや対象者への対応を強化したほか、ガイドを把握しきれていなかった教員向けの内容も追記されていた。教員へのアプローチはこれだけにとどまらず、有志の教員による「生徒指導 P r o j e c t T e a m」を提案し、意見交換や研究に取り組む環境を整えていた。

さらに、子どもたちの気持ちを“見える化”して教員に伝え、動物のキャラクターに扮したカウンセラーとSNS相談ができるアプリ「ぽーち」を導入して悩みやつらい気持ちを抱える子どもたちのサポートも行っていた。

これらの取組により、枚方市では令和8年度までに「学校以外のつながりなし」を「ゼロ」にすることを目標とされているとのことであった。

(3) リーディングDXスクール指定校・生成AIパイロット校としての活動について（広島市）

広島市では、従来の一斉指導に限界を感じていた学校現場において、タブレット、クラウド、学習支援ツール等のICT環境を整えることで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていた。

生成AIを「教える存在」ではなく「学びの伴走者」と位置づけており、その活用にあたっては保護者の同意や年齢制限、ハルシネーション（事実と異なる情報）等の課題があったが、教育特化型ツール「プログルラボ」の導入で安全性を確保し、教科書を用いて事実を確認することで解決していた。

一方で、教員側のICTへの理解や、基盤となる教材の準備等が必要であり、教員間の模擬授業や研修への参加を通してスキル向上が図られていた。

生徒側も暇ではなくなると、授業の認識を変化させてきており、数値的にも学力の向上が見られるが、その効果がこれら授業に起因するか否かは判断できず、意欲や学習の深まりを正確に測る仕組みが求められていた。

7 所感

- (1) オルタナティブスクールにおける子どもたちの自主性や個性を尊重する教育方針は、不登校支援としても機能しており、無認可でありながらも多数の入学希望者が待機していることから、地域にあった教育を考える上での選択肢の一つとして理解するべきである。
- (2) 不登校対策について、教育・福祉・デジタル等の部局が連携して改定された支援ガイドは、不登校生徒の多種多様な居場所づくりにつながり、不登校支援の質を高めていたことから、行政内の縦割りを廃した横断的な体制整備を検討すべきである。
- (3) 生成AIを活用した教育は、準備段階で教員に係る負担は大きいですが、生徒の学習意欲や理解度の向上が期待できるほか、緊急の課題ではないものの、いずれは全ての学校で必要とされることが想定されることから、必要な要素を吟味した上で、将来に向けた準備として取り組むべきである。